# ウィクセルの経済理論

## ——価値・生産・資本——

吉　澤　昌　恭

I　緒論
§1　ウィクセルへの評価—ロビンズとブローグ
§2　『価値・資本及び地代』緒論
§3　『経済学講義 I』序文
II　価値の理論—生産物価格の決定
§4　スミスのパラドクスと限界効用の概念
§5　自由交換と価格—単純なものから複雑なものへ
§6　自由交換からの利益
III　生産と分配—生産要素価格の決定
§7　生産要素の代替性と時間要素
§8　無資本的生産
§9　資本的生産
IV　単純化のための仮定の緩和
§10　生産と交換の相互依存
§11　資本蓄積

## I　緒　　論

### §1　ウィクセルへの評価—ロビンズとブローグ

理論経済学に関するウィクセルの主著は，1890年代に矢継ぎばやに出版されている。1893年刊の『価値・資本及び地代』(*Über Wert, Kapital und Rente*)，1896年刊の『財政理論の研究』(*Finanztheoretische Unter-*

*suchungen*), 並びに1898年刊の『利子と物価』(*Geldzins und Güterpreise*) がそれである。これら三書の内の，第一の書物と第三の書物に於ける主要原理をより一層体系的に再論したものが，1901年と1906年とに出版された『経済学講義』の第一巻と第二巻である。この『経済学講義』はスウェーデン語によって書かれていたが，1913年と1922年にはドイツ語訳 (*Vorlesungen über Nationalökonomie auf Grundlage des Marginalprinzipes*) が，また1934年と1935年には英語訳 (*Lectures on Political Economy*) が，そして1938年と1939年には日本語訳『国民経済学講義』（堀経夫・三谷友吉訳，高陽書院）がそれぞれ出版されている。

ライオネル・ロビンズは『経済学講義』の英語訳に対して序文を書いているが，その序文の中で，ウィクセルを評して次の様に述べている。

「彼と同じくらい優れた経済学者で彼くらい外部からの諸影響を受け入れた人はいない。しかしそれらの影響たるや全部がただ1つの方面からのものとは限らなかった。1890年代に研究を開始して以来，彼は諸学派の論争には超然とした態度をとり，各学派の正しい原理を一様に摂取する。その意味で彼は，こういった初期の諸学派に属さず，かつこれらの学派のおのおのの体系のなかから共通項と個別的な貢献との両者をつかみとることのできる世代の先駆者なのである。理論経済学の主流における連続と進歩との2要因を力強く例証してくれる経済学者の研究は彼をおいて他にみられない。…中略…彼の価値論の大筋に関しては，オーストリア学派の影響が濃厚であり，彼の資本理論に関しては，ベーム＝バヴェルクの影響が明白である。しかし彼の理論の全体は本質的にはワルラスに由来する枠組に収まるものであり，そして彼の理論の細部はウィックスティードとエッジワースとに負うところ大である。[1]」

(1) *Lectures on Political Economy,* Vol. I, Routledge & Kegan Paul, London 1934, 7th impression 1961, p. ix/橋本比登志訳『経済学講義 I』，日本経済評論社，昭和59年，4－5頁。尚，以下の『経済学講義』の引用・参照に際しては，英語訳のページ数と橋本訳のページを挙げることにする。

マーク・ブローグがその著『経済理論の歴史』の中でウィクセルに対して下している評価も，ロビンズのものと軌を一にするものであろう。

「ある意味では，彼〔ウィクセルのこと〕は独創的な思想家ではなかった。つまり，彼は他人のこねたパンを焼いたにすぎない。なるほどヴィクゼル効果のほかに，『高さ』や『広さ』という用語で測定された資本構造という思いつきはあるが，これらは先人の理論の最高の解説であって，経済学の本体への主要な貢献ではなかった。しかし，そのすぐれた才能によって理論的な新しさをもつどんなものよりも価値がある総合，洗練および完成といったものがある。ヴィクゼルが供給したものはこの種の再構築だったのであり，世紀の変わり目にはきわめて必要とされていたものであった。マーシャルの『原理』は，一般均衡を数学的付録に追い払い，資本理論の苦境にまきこまれることなく，ベーム・バヴェルクの要点を吸収した。そのため，マーシャルを読むと，賃金が労働の限界生産力と関係があるということははっきりするが，利子率が資本の限界生産力と強いつながりがあることは少しも明らかではない。要因価格の完全な一般理論といった概念そのものが，マーシャルではほとんど認識されていないのである。ヴィクゼルにおいては，新古典派の伝統のすべてのさまざまな糸が，つまりジェヴォンズの理論，クールノーの利潤の極大化理論，クラークの限界生産力理論，ウィックスティードの生産関数の概念，マーシャルの収穫の法則，そしてワルラスの多元的市場均衡の理論が，ともにひき合わされている。同時に，エッジワース，バローネ，パレートのような同時代の多くの指導的な経済学者たちの批評や解釈が，リカードやJ・S・ミルやマルクスのような過去の偉大な経済学者たちの著書に触れることなく，織物全体のなかに同化され，織りこまれている。マーシャルもそうであったと，異議を唱える人もいるかもしれない。その通りである。しかしマーシャルは，一般的に認められている学説のなかにある欠陥や欠点を，率直に取り組む余地のある困難な問題として示すというよりは，しばしばそれらを隠すことに

成功するというやり方でそれをした。ヴィクゼルは，実業家やしろうとのために書いたのではなかった。彼は経済学を真面目に勉強する学生に向かって書いたのであり，新古典派経済学が建てた家のすべてがよいわけではないことを，認めることを恐れなかった。『講義』のページには，自己満足の徴候もなければ，山頂から見おろすマーシャルの態度も，理論的な同意のおだやかな海で泳いでいる感じもない。ヴィクゼルの『講義』は，誤りを取り除くことのできる規則や手続を準備しながら，研究の進行しつつある経済理論の知的興奮を伝えるという意味では，同時代のどんな他の本よりもはるかにすばらしい。人は経済学を学ぶためばかりではなく，経済学は学習の途上にあるということを認識するためにも読むのである。[2]」（傍点，吉澤）

## §2　『価値・資本及び地代』緒論

自らの書物を「先行する分析から進化するものとしての経済分析の歴史」（『経済理論の歴史』，第二版序文）と位置づけるブローグにとって，先のウィクセルへの評価は，そしてとりわけ傍点を付した部分は，最大級の賛辞である，と筆者は考える。とにかく経済学を少しでも前進させたい，という姿勢がウィクセルの著作から感じ取られる。そうした姿勢は，『価値・資本及び地代』[3]の緒論に於いて，とりわけ顕著に現れている。同緒論の第一章で，当時の理論経済学の置かれていた状況が論じられている。

ウィクセルは，18世紀並びに19世紀の初めにスミス，マルサス，リカードによって理論経済学の急速な発展がもたらされた後は，この領域ではしばらく見るべきものが存在しなかった，と指摘する。そして彼は，静止は退歩をすら伴う，と言う。

---

(2) Blaug, Mark: *Economic Theory in Retrospect,* 3rd ed., Cambridge U. P. 1978.（関恒義・浅野栄一・宮崎犀一訳『新版・経済理論の歴史IV』，東洋経済新報社，昭和61年）邦訳，912－913頁。

(3) *Über Wert, Kapital und Rente,* Verlag von Gustav Fischer, Jena 1893.（北野熊喜男訳『価値・資本及び地代』，日本経済評論社，昭和61年）

「学問の分野では，他の領域と同様，静止は多くは退歩を伴うものである。理論経済学が，すでに得られた成果に，もはやなんの新しい成果も加ええなかったために，その当然の帰結として，前の成果の正しさもまたいよいよ疑われ始めるということになった。[4]」

歴史学派の台頭は，こうした状況と決して無関係でなかったと思われる。ウィクセルは，歴史学派の主張には真理も含まれているが，誇張も含まれている，と言う。

「私見によれば，この推理のうちにはある真理の内容も含まれているが，また著しい誇張も含まれている。歴史的研究がすべての社会科学，したがってまた経済学に，いかに価値があり，いかに不可欠でさえあるとしたところで，それがこのような価値を得るのは，確かにただ人間行為を指導し左右する普遍的法則を示し，これを解明しうるかぎりのことに過ぎない。このような法則が存在しなければ，歴史そのものが把握しえないであろうし，またその学説がわれわれ自身の時代の事情にまったく適用しえないとすれば，それはいま生活するわれわれになんの効用もないわけである。[5]」

歴史学派の台頭を許した，理論経済学の停滞状況を打破するための新しい刺激が与えられ，理論経済学を再活性化させるための道が開かれたのである。ウィクセルによれば，その新しい刺激とは，限界効用理論とオーストリア学派の資本理論だったのである。

## §3 『経済学講義 I』序文

『経済学講義』へのウィクセル自身の序文に於いて，経済学並びに経済現象・経済活動の性格づけが行われている。

---

(4) 北野訳『価値・資本及び地代』，16頁。
(5) 同上，17頁。

「経済学は，相互関係的にかつ全体として眺めた経済諸現象を主題とする学問へと，すなわちすべての社会階級または1国民全体またはすべての国民の集合体（すなわち世界経済 *Weltwirtschaft* とドイツ人がいうもの）に対して一様な仕方で影響を与えるかぎりでの経済諸現象，こういった諸現象を主題とする学問へと，ますます転身しつつある。経済現象または経済活動とは，物質的必要を充足せんとするすべての計画的努力のこと，あるいはもっと精確に定義すれば，利用可能な手段を用いて最大可能な成果を上げようとする努力のこと，換言すると，最小可能な手段を用いて一定の成果を上げようとする努力のことである。[6]」

さて，以上の如くに性格づけられた経済学は，ウィクセルによれば，三つの部門に区分される。第一の部門は，理論的部門であり，そこでは，経済諸法則の叙述，経済諸現象相互間の関係の叙述が目指される。ウィクセルはこの部門をさらに，消費の一般理論（これは更に人口の理論と，価値と交換の理論に再区分される），生産と分配の理論，資本の理論，貨幣と信用の理論に区分する。

第二の部門は実践的部門であり，この部門は，経済諸法則を具体的な種々の経済活動に応用してゆくことをその内容とする。

第三の部門は社会的部門であり，そこでは既存の社会制度そのものにも批判的吟味が加えられる。

以上を整理して図式化すれば次のようになる。

(6)　*Lectures on Political Economy,* p. 2/橋本訳，33－34頁。

理論的部門（理論経済学）
＝経済諸現象相互間の関係の叙述
- 消費の一般理論
  - 消費者の数（人口の理論）
  - 欲求の質的側面（価値の理論，交換の理論）
- 生産と分配の理論
- 資本の理論
- 貨幣と信用（交換手段）の理論

実践的部門（応用経済学）＝現存の社会制度（私有財産・契約の自由）を前提にした理論の応用

社会的部門（社会経済学または経済政策）＝現存の社会制度の批判的吟味

ウィクセルの主要な関心は第一の部門，即ち理論経済学にあり，『価値・資本及び地代』と『経済学講義』の第一巻は，消費の一般理論，生産と分配の理論そして資本の理論を論じたものである。貨幣と信用の理論は，『利子と物価』並びに『経済学講義』第二巻の主題である。本稿では，後者の貨幣と信用の理論を取り扱わない。それは稿を改めて論ずることにしたい。

ここで，「人口の理論」について一言述べておかねばならない。ウィクセルは人口の理論を非常に重視しており，スウェーデン語初版『経済学講義』の第一巻第一章は人口の理論に当てられていたが，その後彼は人口の理論を小冊子として独立させ，第二版以降では，「人口の理論」の表題のみが残され，その本文は割愛されることとなった。1913年と1922年に出版されたドイツ語訳 (*Vorlesungen über Nationalökonomie auf Grundlage des Marginalprinzipes*) では「人口の理論」が復位させられている。しかし，1934年と1935年に出版された英語訳 (*Lectures on Political Economy*) では「人口の理論」は復位させられていない。橋本訳『経済学講義 I』は「人口の理論」を復位させている。従って，英語訳と橋本訳では章だてが食い違っているのである。

## II　価値の理論—生産物価格の決定

### §4　スミスのパラドクスと限界効用の概念

『経済学講義』第一巻第一章（橋本訳では第二章）冒頭で，ウィクセルは，人間の諸欲求 (human needs) を充足するために利用し得る手段に対して我々が付与する種々様々の重要性 (significance) は交換価値 (exchange value) または価格の中に客観的表現 (objective expression) を見い出す，と述べている。そして，ウィクセルによれば，価値理論の課題は，なぜある財が永続的または一時的にある価格を持ち，なぜ他の財がそれとは全く異なる価格を持つのか，を説明することにある。[(7)] ここで交換価値或いは価格とは，財や用役が他の財や用役と交換される比率のことである。

さて，以上のような交換価値と，それとは区別される使用価値とに関するアダム・スミスによって提示された，有名なパラドクスがある。

「注意すべきことは，価値ということばには二つの異なる意味があるということであって，それはあるときにはある特定の対象の効用を表現し，またあるときにはその特定の対象を所有することによってもたらされるところの，他の財貨に対する購買力を表現するのである。前者を『使用価値』(value in use), 後者を『交換価値』(value in exchange) とよんでもさしつかえなかろう。最大の使用価値をもつ諸物がほとんどまたはまったく交換価値をもたないばあいがしばしばあるが，その反対に，最大の交換価値をもつ諸物がほとんどまたはまったく使用価値をもたないばあいもしばしばある。水ほど有用なものはないが，それでどのような物を購買することもほとんどできないであろうし，またそれと交換にどのような物をえることもほとんどできないであろう。これに反して，ダイヤモンドはどのような使用価値もほとんどないが，それと交換にきわめて多量の財貨をしばしば

(7)　*Lectures on Political Economy*, p. 16/橋本訳，106頁。

えることができるであろう。[8]」

以上の如き水とダイヤモンドのパラドクスに対して，ウィクセルは次の様に述べている。

「文字どおりに解釈すれば，この命題は，意味をなさないか，用語上の矛盾であるか，そのどちらかであるように思える。第1に，スミスはどの使用価値を考えているのか。明らかに，それは，〈地球が内包する〉水の全量またはダイヤモンドの全量の効用であろうはずがない。なぜならば，万一，世界に存在する水の全量を世界に存在するダイヤモンドの全量と交換することが可能になるとしても，後者に比べて前者が無限大の交換価値をもつことがすぐに明白となろうからである。〈だから〉この場合の比較は，むろん，使用可能な数量，たとえば1リットルの水または重さ1グラムのダイヤモンド，に関するものでなければならない。[9]」

つまり，同じ物であっても，その数量次第でそこから得られる効用は異なり得るのである。最も重要なのは，ある人にとって使用可能な財の「数量」なのである。例えば乗っていた船が難破したために救命ボートで助けが来るのを待たねばならず，また，その際1リットルの水筒の水だけで何日間も渇きを癒さねばならない羽目に追い込まれた人と，川のほとりでキャンプしている人の場合とを比べてみよ。前者の場合には1リットルの水から得られる効用は途方もなく大きいものであろうが，後者の場合はそうではないだろう。いずれの場合にも，水という物質の使用可能な最終単位から得られる「限界効用」が当該人物にとっての水の使用価値を決定するのである。

---

(8) 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』，岩波文庫，昭和34－41年，第一分冊146－147頁。

(9) *Lectures on Political Economy,* p. 29/橋本訳，123頁。

## §5　自由交換と価格―単純なものから複雑なものへ

上記の例の二人の人物の間で交換行為が行われるとは考えられないが，現実の世界では多くの交換が行われている。それでは，交換が行われた際に，種々の財の交換比率，即ち，価格はいかに決定されるのであろうか？これが『経済講義』第一巻第一章第三節（橋本訳では第二章第三節）の主題である。その際の論述は，単純なものから複雑なものへ，という順序で進められてゆく。

### A 単一財の種々の用途

最も単純な交換の形態として最初に取り上げられるのは，ある一人の人間がある一個の財の種々の用途に対して選択を迫られているような場合である。例えば，原始林への入植者が自らの貯蔵する5袋の穀物の用途を決めようとしており，彼には，パンまたは穀物食という形での「直接的」消費と，自らの貯蔵する穀物の一部を鶏飼育に当てることによって手に入れる鶏肉の形での「間接的」消費という二つの選択肢のみが開かれている，と仮定しよう。この入植者はどれだけの量の穀物を直接的消費に，又，どれだけの量の穀物を間接的消費に当てるであろうか？彼が合理的である限り，直接的消費に用いられる穀物の最終単位から得られる限界効用と，間接的消費に用いられる穀物の最終単位から得られる限界効用が等しくなるように，直接的消費と間接的消費の間に穀物が配分されるであろう。

「経済性の追求によって規制される消費において，限界効用は，つまり直接的に消費される最後の1キログラムの効用と動物性食物に変換される最後の1キログラムの効用とは，均等化しなければならない。[10]」

さてこの場合，穀物と鶏肉の交換比率はいかなるものとなろうか？仮に，1キログラムの鶏肉を生産するのに5キログラムの穀物が必要であるとす

(10)　*Lectures on Political Economy,* p. 37/橋本訳，134頁。

れば，穀物食として利用される穀物の最後の1キログラムから得られる効用と，鶏肉生産のために利用される穀物の最後の1キログラムから得られる効用は等しくなるのだから，鶏肉の最後の1キログラムの効用は穀物食の最後の1キログラムの効用の5倍となるであろう。従って，鶏肉は穀物の5倍の交換価値をもつことになる。(勿論，この場合には，「交換価値」という表現は厳密には正しくはないであろうが。)

以上の考察を，一財の三用途以上の事例に拡張することは容易である。

**B** 所与の価格での交換

第一の事例は，「交換」という語の通常の用法からはやや逸脱したものであったが，第二例以下では，現実の世界に於ける交換が取り上げられる。第二に論じられるのは，個々の買手や売手にとって諸商品の交換価値が不変の大きさとして前もって与えられている場合である。例えば，一人の農夫が販売用の農産物を所有している一方で，コーヒー・砂糖・魚・工業製品等を購入したいと考えていると仮定しよう。この場合，この農夫は自らの所有する農産物のどれだけの量を販売し，種々の商品をどれくらい購入するであろうか？彼の販売・購入活動は，全ての財から得られる限界効用が均等化するまで続けられるであろう。

**C** 孤立的交換

市場の影響から遮断された二人の孤立した人物の間で交換が行われる場合，価格形成はいかなる形態のものとなるであろうか？例えば，平地の農民と山地の農民が町へ通ずる道路上で出会う，と仮定しよう。前者は町へ売りに行くつもりの穀物1袋を所持しており，後者はやはり町へ売りに行くつもりの薪$\frac{1}{2}$荷を所持しており，しかも，両者が，互いに相手の商品を必要としており，各々の商品を交換し合うことに同意したとしよう。交換が成立すれば，二人とも町までの余分の道のりを行かなくても済むことになる。平地の農民は，場合によっては，自分の穀物1袋を薪$\frac{1}{4}$荷と交換し

てもよいが，それより少ない量の薪とは交換したくないと考えており，他方，山地の農民は，場合によっては，自分の薪$\frac{1}{2}$荷を穀物$\frac{1}{2}$袋と交換してもよいが，それより少ない量の穀物とは交換したくないと考えている場合に，穀物と薪の交換比率はいかなる水準に落ち着くであろうか？二人の農民が満足できる交換比率の下限はそれぞれ次の通りである。

$$\text{平地の農民の満足の下限：}\frac{\text{穀物}}{\text{薪}}=\frac{1}{1/4}=\frac{4}{1}$$

$$\text{山地の農民の満足の下限：}\frac{\text{穀物}}{\text{薪}}=\frac{1/2}{1/2}=\frac{1}{1}$$

穀物と薪の交換比率は「4対1」と「1対1」の間になければならないが，それが最終的にどこに決まるかは，価格理論の観点からする限り，不確定である。実際の交換比率は二人の農民の交渉の巧拙やお互いの相手に対する好意の度合等によって決まってくるであろう。

**D** 公開市場における二財の交換

Bの事例では，価格は所与である，として議論が進められていたが，価値理論は，最終的には，この価格そのものを説明しなければならない。自由交換が支配的な場合には，個々の売手や買手が自らの行動によって価格に影響を与え得る余地は非常に限られている。仮に，一部の売手たちが売りおしみをすることによって，自己の保有する商品の価格のつり上げを計ろうとするなら，彼らは自分達の商品が売れ残ってしまうかもしれないという危険に直面することになる。こうした危険を回避するためには，全ての売手がカルテルまたはトラストを形成することによって，商品の供給量に制限を加えることが必要になってくる。売手達のこうした動きに対抗して，買手の側でも単一の共同購入組織が形成されるなら，事態は先の孤立的交換に逆戻りすることになり，理論的には価格は不確定となる。

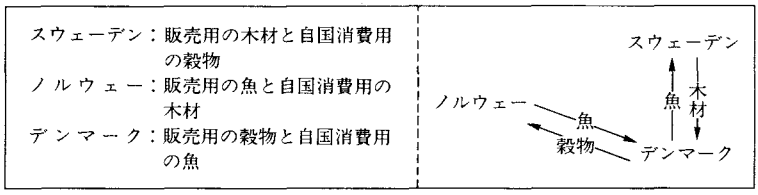
しかしながら，こうした共同販売・共同購入のための組織の形成を無視

し，全般的な自由競争を想定するならば，諸商品の価格は，各経済主体の経済活動の帰結ではありながら，各経済主体にとって所与のものであるに等しきものとなる。そして，それはひとつの均衡点へ近づいて行く傾向をもつであろう。

「全般的な自由競争を想定するとすれば，純粋な市場取引きに関するかぎり，諸財の相対価格は，緩急の差はあるにせよ，ある均衡点に近づくか，そうでなければ，その均衡点の周りを振動するか，そのいずれかであろう。この均衡点においては，商品の全保有者は，相対的飽和点に至るまで，交換することができるであろう。すなわち，彼らは，その市場価格において交換を行なってそこになんらかの利益が見いだせるかぎり，交換をつづけるであろう。[11]」

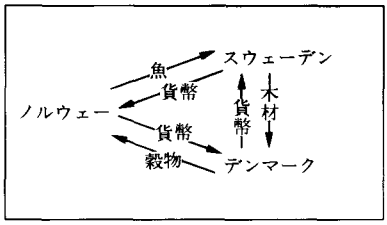
**E** 多数財の交換と間接交換

市場に三財以上が登場するや否や，一般に，直接交換のみによって完全な均衡は達成され得なくなり，間接交換が登場してくることとなる。例えば，スウェーデンは販売用の木材と自国消費用の穀物を持っているが，魚を購入しなければならず，ノルウェーは販売用の魚と自国消費用の木材を持っているが，穀物を購入しなければならず，そして，デンマークは販売用の穀物と自国消費用の魚を持っているが，木材を購入しなければならない，と仮定してみよう。




(11) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 53/橋本訳，155頁。

この場合には，いかなる直接交換も起り得ない。しかし間接交換なら起り得る。例えば，デンマークが仲介者の役割を果し，自国の余剰の穀物と交換にノルウェーの余剰の魚を買い入れて，今度はスウェーデンに魚を売り渡し，これによって自国の木材に対する欲求を満たす場合には，三国全てに於いて木材，穀物並びに魚に対する欲求が満たされることとなろう。




しかし，以上の様な形式の交換はいかにも不便である。もし何らかの交換手段，即ち，貨幣が導入されるならば，交換ははるかにスムーズに進行するであろう。先の事例を踏襲するならば，スウェーデンは貨幣と引き換えにノルウェーから魚を買い，ノルウェーはこの貨幣でデンマークから穀物を買うことができる。デンマークはもはや仲介者の役割を果す必要から開放され，ノルウエーから受け取った貨幣でスウェーデンの木材を購入できるようになる。

さて，以上の如き三国間取引に於いて用いられる貨幣の量はいか程のものとなるか？換言すれば，「貨幣の価値」はどれ程のものとなるか？この問題は『経済学講義』第二巻の主題なのであり，第一巻の以下の論述は，「貨幣価値は不定」であるとの想定の下に進められてゆく。

## §6　自由交換からの利益

自由交換の下での価格形成はいかなるものとなるか，が『経済講義』第一巻の前半部分に於ける中心テーマである。それでは，ウィクセルは自由

交換の擁護者なのであろうか？既に§3で述べた如くに，ウィクセルは経済学を，理論的部門（理論経済学），実践的部門（応用経済学），並びに社会的部門（社会経済学または経済政策）の三部門に区分しており，彼の関心は主として第一の部門にある。そうであるとはいえ，『経済学講義』第一巻第一章第五節（橋本訳では第二章第五節）の叙述から，自由交換に対するウィクセルの考え方を多少は窺い知ることができる。

「自由交換は，財産または所有権の現存の条件の下で，全関係者に最大の満足量をもたらす」という命題は，ある意味で自明のことであり，この命題を用いて自由交換を正当化することはできない，とウィクセルは主張する。それが自明であるのは，もし各人が自分の財産と生産力を自由に使用するのを許されるならば，人は，言うまでもなく，それらのものを出来る限り有利に使用しようとするからである。

他方，次の様な事情が存在する場合には，自由交換は，「望ましくないもの」となるかもしれない。

①ある社会の全ての構成員の，人生の「善きもの」の享受能力並びに欲求度はほぼ等しい。

②その社会に於ける富と所得の分布状況は著しく不平等なものになっている。

このような場合には，限界効用逓減の法則に基づいて，富と所得の再配分，即ち，自由交換の帰結の修正を提唱することの方こそが正当化されるかもしれない。そして，ウィクセルはこうした議論に十全なる理解を示している。

だとすれば，ウィクセルは自由交換の批判者なのであろうか？自由交換の批判者だと結論づけることも許されないように思われる。なぜなら，彼は次の様にも述べているからである。

「自由競争を侵害するような政策が上記のような結果〔財産配分の変更による社会全体の総効用の増大のこと，吉澤註〕をもたらしうるとしても，そのような政策が正しい指導のもとに遂行されなければならないということ，これは強調するまでもない。一般に，無制限な自由の〈体制の〉ほうが，指導を間違えた制限と強制との体制よりも，はるかに望ましいであろう。1国の政府が民主主義的諸原理を基礎としているかぎり，そのような政策が導入されるのはそれが大多数の人々の利益になるときだけであるという，100パーセントまでとはいかないけれども，確実性の高い保証が存在する。これに対して，特権をもった少数者たちが商工業政策を牛耳るような場合には，そうはならないと推定しうる確固たる根拠が存在するのである。[12]」

いずれにせよ，ウィクセルは無条件的な「自由交換の擁護者」でもなければ，無条件的な「自由交換の批判者」でもない，というのが真相であろう。

## Ⅲ　生産と分配―生産要素価格の決定

### §7　生産要素の代替性と時間要素

以上の生産物価格の形成過程の分析は，生産量の変化を捨象して進められてきた。しかし，その分析を現実により近づけるためには生産の分析が不可欠である。なぜなら，生産量の変化は価格に影響を及ぼすからである。さて，ウィクセルは，生産の理論を展開するに当って，次の二つの事実を捨象することは許されない，と主張する。[13]

①種々の生産要素がある財の生産に寄与する度合は所与のものでも確定的なものでもない。

(12)　*Lectures on Political Ecomomy*, pp. 81-82/橋本訳，193-194頁。
(13)　*Lectures on Political Ecomomy*, pp. 99-100/橋本訳，218-219頁。

②生産に於ける時間要素は，経済的にみて，最大級の重要性を持つ問題である。

第一の事実に関して重要なのは，私有財産と契約の自由を前提とするような社会体制の下で経済活動を行う企業は，できるだけ安価に生産することを目指す，ということこれである。例えば，ある人が広大な土地を所有しているが，資本は全く所有していない，と仮定しよう。もし彼が無資本のまま，自分自身の労働と家族の労働とによって，その土地を耕作するなら，その農地の面積に比べて，生産高は極度に少ないことであろう。そこで彼は，資本を借入れ，労働者を雇うことを思いつくであろう。その際，彼がどれだけの量の資本を借入れ，何人の労働者を雇い入れるかは，所与でもなければ確定的でもない。それらの数値は，資本への報酬たる利子と労働力への報酬たる賃金の多寡に応じて，異なったものとなるからである。

第二の，生産に於ける時間要素は，解明することがより困難な性質のものである。ウィクセルは，生産の理論を展開するに当っても，価格の形成過程の分析の場合と同様に，単純なものから複雑なものへ，という形で議論を進めてゆく。従って，時間要素の解明はより後の段階へと先送りされている。（本稿では，これを§9で論じる。）

生産過程を分析するに際して，単純化のための次の四つの仮定が設けられている。それらの内，第二の仮定と第四の仮定は後に取り除かれる。

①自由競争
②生産物の価格変化の捨象
③生産要素の消費的用途から得られる効用の捨象
④定常的状態：生産要素の総供給量の変化の捨象

## §8　無資本的生産

### A 無資本的生産の意味

野生の果実の単なる採集といった，最も原始的な形態の生産を別にすれば，資本を全く使わない生産などというものは有り得ない。しかし，資本が生産に於いて果す役割を浮彫りにするための準備作業として，またひとつの擬制として，ウィクセルは，資本への分け前を無視できる生産形態を分析する。つまり，そこでは資本は「自由財」として取り扱われるのである。そこで，次の様な事例が想定される。（『経済学講義』第一巻第二章第一節／橋本訳では第三章第一節）

①全ての生産が一年という期間の経過する間に営まれる。
②人々の使用する少数の簡単な道具や用具も，この一年という期間の間に，製作され且つ完全に消耗されてしまう。
③完成生産物は年度末に於いてのみでき上り，賃金は全て年度末に支払われる。

さて，以上の様な条件の下で生産が行われた場合，生産物は種々の経済主体の間にいかに分配されるであろうか？生産の形態としては，次の三通りのものが考えられる。

①地主が労働者を雇い入れて生産を行う場合
②労働者が土地を賃借りして生産を行う場合
③企業者が，労働者を雇い入れ且つ土地を賃借りして生産を行う場合

論理的には以上の三つが考えられるが，実際にはウィクセルは，地主が企業者の役割をも果す第一の場合と，労働者が企業者の役割をも果す第二の場合しか論じておらず，第三のものの考察は行われていない。

**B** 企業者としての地主―賃金の決定

まず，出発点として次の二つの事実が挙げられる。

①土地の私有

②収穫逓減：追加労働による追加生産物は労働の平均生産物より小さい

さて，ある時点で，追加労働による追加生産物が賃金（生産物で支払われるものとする）を上回っているならば，地主は雇用を増大させるであろう。それでは，地主はどの点まで雇用を増大させるであろうか？雇用順位が最後の労働者の追加生産物が賃金と等しくなる点，換言するならば，労働の限界生産力が賃金と等しくなる点までである。

賃金支払い後に，地主の手元に残ったものが地代（プラス企業者利潤）である。

**C** 企業者としての労働者—地代の決定

次の様な事実を想定した場合に，地代はいかなる水準に決定されるであろうか？

①労働の総供給量は一定である

②全ての土地が同程度に良質である

③収穫逓減：追加的土地による追加生産物は土地の平均生産物より小さい

ある時点で，追加的土地による追加生産物が地代を上回っているならば，労働者は土地の借入れを増大させるであろう。そして，その借入れは，借入れ順位が最後の土地の追加生産物が地代と等しくなるまで，即ち，土地の限界生産力と等しくなるまで続けられるであろう。

地代支払い後に，労働者の手元に残ったものが賃金（プラス企業者利潤）である。

**D** 企業者利潤

ウィクセルの体系に於いて企業者利潤はいかなる位置を占めているのであろうか？自由競争が支配的な場合には，企業者利潤そのものはゼロに向かう傾向を持つ，とウィクセルは論じている。[14] 次の二つの条件の内のいずれかが満たされるならば，生産物は賃金と地代とに分配され尽くして，企業者利潤はゼロになる，とウィクセルは言う。

①大規模経営と小規模経営が同等に生産的である。
②それを超えると生産規模の拡大がもはやなんの利益ももたらさなくなるという限界に全ての生産的企業が到達している。

第一の条件は，生産の相対的利益と経営規模は無関係である，ということを意味しており，ある生産部門における一般原則としてこうした条件が満たされることは絶無に等しい，ということをウィクセルも認めている。しかし，一般論として，問題とする企業にとっての最大収益がある特定水準の経営規模に於いて獲得される，とウィクセルは言う。この最大の収益が可能になる経営規模，即ち，最適経営規模は，「収穫逓増」から「収穫逓減」への転換点に位置しており，そこでは，賃金と地代が限界生産力の法則によって決定され，企業者利潤はゼロになる，というのである。

ところが，ある生産部門に於いてこの最適規模は余りにも高すぎて，この水準に到達し得る企業の数が余りにも少な過ぎる場合には，自由競争とは異なった状況が出現するに到る。その場合には，企業家は独占利潤を獲得し続けることが可能になって，企業者利潤がゼロになる傾向が破られることになるのである。

しかし，企業者利潤を論ずるに際して，ウィクセルは不確実性の問題を無視しているし，また，彼の主要関心は，自由競争下の生産物と生産要素の価格形成過程の分析にある，という点を考えるなら，彼の企業者利潤についての議論から余り多くを読み取ろうとすべきではないのかもしれない。

(14) *Lectures on Political Ecomomy,* pp. 125-133/橋本訳，255-266頁。

**E** 技術革新が地代と賃金に及ぼす影響

ウィクセルによれば，機械には，①資本としての属性と，②労働と土地が相互に代替し合う際の条件を変更するという属性とがある。機械が導入され，機械が人間労働にとって代るなら，一方では，労働の生産力が増大して，より高い賃金の支払いを可能にする条件が生み出されることになる。しかし，機械が多くの労働者を過剰にし，その結果，失業者達の間での競争が賃金下落を引き起こすかもしれない。このいずれの要因がより優勢になるか，を決定し得る単純な原則は存在しない，とウィクセルは言う。

「生産技術上にある変化が生じるとき，この変化自身には賃金を騰貴させる傾向があるのかそれとも下落させる傾向があるのかということ，これを教えてくれる単純かつ理解しやすい原則のようなものを樹立することは，ほとんど不可能である。[15]」

## §9 資本的生産

**A** 資本の生産力

いよいよ資本並びにそれと深い関わりのある「時間要素」が論じられるべき段階に達した（『経済学講義』第一巻第二章第二節／橋本訳では第三章第二節）。資本問題の難しさの一原因は，生産的資本は現実に於いてその形態を様々に変える点に存する，とウィクセルは言う。家屋やビル，器具や道具や機械，家畜，加工用の原材料，作業遂行中の労働者を扶養するための食糧や日用品といったすべてのものが「資本」に含められる。しかし，こうした財貨すべてに共通する性質が少なくとも二つ存在する。

「これらすべての財貨は，ただ1つの性質を，すなわち，それらの財貨が一定量の交換価値を有するという性質を，共有している。そこで，それらの財貨を，ただ1つの価値額として，交換手段つまり貨幣の一定量とし

(15) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 143/橋本訳，279頁。

て，一括把握しうるのである。[16]」

つまり，資本とは，「貸し付けられた貨幣」の一定額を意味する，というわけである。資本に含められる種々の財貨に共通するいまひとつの性質は，資本それ自身が生産物だということである。

「資本それ自身が生産物である（『生産された生産手段 (produced means of production)』という表現は，資本に関する普通の，そしてある意味では非常にうまい，定義である）。ここでもまた，資本は，労働および土地に比較して，あるいは少なくとも未熟練労働および処女地に比較して，著しく異なっている。人間は，生まれてくる。しかし，人間は―『奴隷を繁殖させる』ような場合を例外として―，生産されるのではない。そして，自然力の総量も，物質の総量同様，人間の力では増減させることのできない代物である。[17]」

資本とは「生産された生産手段」である。従って，それは，究極的には，労働と土地に分解可能である，とウィクセルは言う。[18] それ故に，労働と土地のみが本源的生産要素である。しかし，生産手段として蓄積された労働や土地は，生のままの労働や土地と違った形態をとり，能率向上をもたらし得るのである。そして，この点に於いて，時間要素が決定的重要性を持つに到るのである。この時間要素の介在による能率の増大こそが，資本への報酬の源，即ち，利子の源になる，というわけなのである。

**B** 一年間の投資

ウィクセルは，資本を「貯蓄された労働及び貯蓄された土地」(saved-up

(16) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 145/橋本訳，281頁。
(17) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 145/橋本訳，282頁。
(18) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 149/橋本訳，288頁。

labour and saved-up land) の一つの凝集量とみなすことを提唱する。

「われわれは，資本をば，貯蓄された労働および貯蓄された土地の1つの凝集量であってしかも複数の年度を経て貯蓄された凝集量である，とみなすことにしたい。[19]」

さて，かくの如き性格づけを与えられた資本が時間の経過と共に，どのように成層化されてゆくのであろうか？まず，現行年度の生産に直接使用し得る労働資源及び土地資源と並んで，前年度ただ一年間の間に「貯蓄された労働資源及び貯蓄された土地資源」が種々の資本財という形で存在し，且つこれらの資本財が現行年度の生産に於いて完全に消耗されるような場合が分析される。この場合には，現行年度の生産に使用可能な生産要素は四つになる。①生のままの労働，②生のままの土地，③貯蓄された労働，④貯蓄された土地，の四つがそれである。現行年度の生産に直接使用可能な労働及び土地の一定量に「貯蓄された労働及び貯蓄された土地」の同一量を加えるならば，多くの場合，生産力が増大するであろう。つまり，このことは，「貯蓄された労働及び貯蓄された土地」の限界生産力が現行年度に直接使用可能な労働者及び土地の限界生産力よりも大きい，ということを意味している。かくして，資本と利子に関する次の如き定義が与えられることとなる。

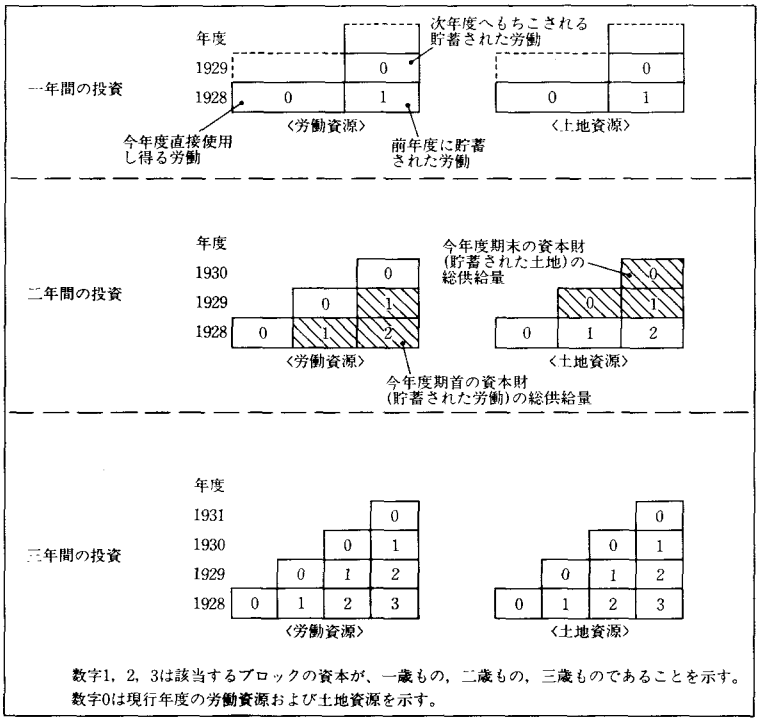
「資本とは，貯蓄された労働および貯蓄された土地のことである。利子とは，貯蓄された労働および土地の限界生産力と，現行年度の労働および土地の限界生産力との，差額のことである。[20]」

ここで，理論上のひとつの問題が生じてくる。生産要素の総供給量の変

(19) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 150/橋本訳，289頁。
(20) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 154/橋本訳，294頁。

化が生じない定常的状態の下で，なぜ利子がゼロとならないのか，というのがそれである。ウィクセルの答えは次の通りである。

「貯蓄された労働および土地〈の供給量〉がこれらのための多くの有利な用途に比べてそれほど十分ではないのに対して，現行年度の労働および土地〈の供給量〉がこれらのための〈有利な〉諸用途に対して相対的にみて豊富に存在するがゆえにのみ，貯蓄された労働および土地の限界生産力がより大」[21]となるのである。




(21) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 155/橋本訳，296－297頁。

**C** 多年間の投資

資本の量が増えるならば，利子率は低下し，ゼロへと近づいて行くだろう。しかし，利子のゼロ化現象が出現する以前に，一年間の投資は，大抵の場合，多年間の投資によって取って代られて行くであろう，とウィクセルは言う。一年間の投資から多年間の投資への切り換え，つまり，投資期間の延長によって，資本群の数は，「高さ」(height) と「幅」(breadth) の両面において増大する（前頁の図を参照せよ）。もし，技術革新のない状態の下で，資本増加が起るならば，一方で，貯蓄された資源（即ち，資本）の限界生産力は下り，従って，利子率は低下するのに対し，他方で，現行年度の労働と土地の限界生産力は上昇し，従って，賃金と地代は上昇するであろう。

もし，長期ものの投資を以前よりもより有利化する技術革新が起るならば，資本の水平次元（幅）は減少し，垂直次元（高さ）は増大するであろう。そうなれば，今年度中に使用される資本量は減少し，他方，今年度中に直接生産に用いられる労働と土地の数量が増大し，前者の限界生産力の上昇，後者の限界生産力の下落が生じ得るのである。

それ故に，「資本の貯蓄者は根本的には労働の味方であるのに対して，技術の発明家は往々にして労働の敵[22]」となり得るのである。

## Ⅳ 単純化のための仮定の緩和

### §10 生産と交換の相互依存

生産要素価格の形成過程の分析（§8～§9）に於いては，生産物価格一定の仮定が設けられていた。『経済学講義』第一巻第二章第三節（橋本訳では第三章第三節）では，この仮定が取り除かれる。そうすることによって，生産と交換が相互に作用し合う現実の世界へ一歩近づくことが可能になる。ウィクセルによれば，その際，問題を二種類のものに区分して議論を進めてゆくのが有益である。

(22) *Lectures on Political Ecomomy*, p. 164/橋本訳，309頁。

「これら2問題のうちの1つをわれわれ流に仮定すると，こうである。2種の〈相互に〉交換され合う商品が〈それぞれ〉1国または1地域において生産され，これら2国または2地域の間では労働または資本が移動せず，したがってそれぞれの社会での利用可能な全資源が1商品の生産に使用される，と。他の1問題をわれわれ流に仮定すると，こうである。鎖国状態の経済ではあるがしかし一方の産業から他方の産業へ土地・労働・資本が移動しうるという事情のもとで，2商品の生産が行なわれる，と。前者は，経済学において，普通，国際貿易および国際価値の理論と呼ばれている分野を代表する問題であり，後者は，自由競争のもとでの国内交換の理論を代表する問題である。[23]」

**A** 国際貿易および国際価値の理論

各国が自然的諸条件のせいでただ一種類の財のみを生産しており，しかも，各国で自由競争が支配的であれば，それぞれの国の生産者達は，調達可能な手段を用いて純益を極大化しようと努力し，また，それぞれの国の産出総額を極大値に到達させるであろう。そして，彼らは他国の生産者と交換を行うであろう。

「自由競争が存在する場合には，生産および交換の法則に従って，各国は，国産品をできるだけ大量に生産し，そして，供給と需要とを正常な事態のもとで均等化させるそのような価格において，交換を行なうであろう。[24]」

つまり，§8～§9で論じた生産法則によって，賃金・地代・利子の形態でそれぞれの国のそれぞれの個人に帰属する諸商品の数量が決定され，§5で論じた市場価値法則によって，相互に交換される諸商品の数量とそ

(23) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 196/橋本訳，355頁。
(24) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 197/橋本訳，356頁。

の交換比率が決定されるのである。

**B** 国内交換の理論

利用可能な生産諸要素が，一方の財の生産から他方の財の生産へと自由に移動し得る場合には，賃金・地代・利子の三者が二つの生産部門の間で均等化することになる。こうした均等化は，一国内に於いてのみ起り得るのであって，生産要素移動に障壁の存在する二国間に於いては起り得ないのである。

## §11 資本蓄積

定常的状態の仮定をはずした場合，最も大きな影響を受ける生産要素は資本である。

「資本は，土地とは異なって―そして短期間においては労働とも異なって―，物理的に限定されているものではない。資本はいつでも，貯蓄によって増加し，不生産的消費によって減少しうるものなのである。[25]」

資本蓄積は非常に複雑な現象であって，資本蓄積に関する議論は全く未発達である，とウィクセルは言う。彼は，資本蓄積に作用する一要因としての利子率に言及している。蓄積を行おうか否かを考えている人にとって重要なのは，例えば，現在の一万円と十年後の二万円とではいずれがより大なる主観的価値を持つか，ということである。そうした人に対して利子率は二重の作用を及ぼす。

①高い利子率は，現在の貯蓄がもたらすであろう収益を，従って，現在貯蓄される最終資本単位の将来の効用を増大させる。

②高い利子率は，貯蓄率を一定とすると，生活物資を将来より豊富に供

(25) *Lectures on Political Ecomomy,* p. 207/橋本訳，369－370頁。

給するに到り，このようにして個人にとっての将来財の限界効用を減少させる。

個人の貯蓄というのは非常に複雑な現象ではあるが，全体としての社会に対しては，次の様に結論づけ得るであろう。

「全体としての社会にとっての，資本蓄積とは―これが急速すぎることなくそして現在の消費手段を過度に吸収しすぎないかぎりでは―，低い限界効用を高い限界効用と交換することにほかならない。それゆえにこのような諸条件のもとでは，われわれは，不断の資本蓄積―たとえ逓減的な率においてであるにせよ―と利子率の不断の低下とが併発すると予想すべきである。[26]」

本稿の作成に当り，本学，大城肇並びに仁平耕一の両氏から幾つか有益なコメントをいただきました。末尾ながら感謝の意を表わしておきたいと思います。

(26) *Lectures on Political Ecomomy*, p. 209/橋本訳，372頁